



Die Eiche ティ・アイヘ

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in der Präfektur Chiba

事務局 〒274-0822 船橋市飯山満町2-681 ワールドナーシングホーム内

Phone: 047-467-6111 Fax: 047-467-6123

講演会開催



講演する平尾会長



講演会参加の皆さん(1)

本年はドイツ年記念行事を10月に控えている関係もあり、平尾浩三会長による講演「短歌にみる9・11」(詳細下記)とワインを楽しむ会を合わせて7月2日(土)に西千葉駅前の「サン」にて実施された。梅雨明け前であったが幸い雨は降らず、蒸し暑い午後となった。結局35名の会員が集まり、会長からは9・11テロやアフガン戦争に関する短歌が如何に多く朝日新聞に投稿されたかとの説明や印象に残った短歌50首を取り上げて、解説を加えられた。最後に、会長と同じ短歌の会に入っている会員の館野氏、下川さん他14名の歌も紹介された。

続いての懇親会では、デュッセルドルフ日本商工会議所藤本修事務総長が6月15日の同市交響楽団来日演奏会に付き添って来られた際に当協会に寄贈して頂いたフランクフルトワインや、橋口常任理事が5月28日の同市ジャパン・デーに自費参加された際に購入してきた同種ワインなど、ワイン主体の飲み物が出され、またビール・グラスは同市エルヴィン市長サイン入り特製グラスが使用されて会員の注目を集めた。

短歌にみる9・11

会長 平尾 浩三

多くの日本人が短歌に深く親しんでいるという事実は今日、外国でも識者の間ではかなり知られているが、それはえてして日本人にある人間と自然・風景との一体感の面から見られ、そこでは日本人の花鳥諷詠の優雅さのみが強調され易い。

しかし今日における私たちと短歌との関係は、そのように単純に片付けられるものではない。殺伐として不安に満ちた現代に生きる私たち日本人が、現実世界の諸事件に対してなんらかの反応を示し、反応を言葉によって記録したい、それを出来るだけの確・明解に表現したいと、懸命に努力する姿――短歌はこの面からも注目されるべきであろう。

時間制約のため、きょうは二〇〇一年九月十一日のニューヨークにおけるテロ事件、ついで起こったアフガニスタン戦争が、日本の短歌によってどのように捉えられたかというのを、朝日歌壇掲載のアマチュア短歌に焦点を当てて検討したい。同年十月には同欄全掲載歌の内の三三%が、十一月には四一%がこのテーマを扱うもので占められており、これらを同期間の朝日俳壇掲載句と比較する時、この事件に対する短歌投稿者および選者の敏速で真剣な反応が、まず統計的に窺われるのである。

掲載歌から幾首かを選んで、紹介・吟味しよう――

ゆつくりと巨大なビルの崩れゆく画像が地球の言葉を奪う

(寺田允美)

焼け跡に半旗をかかげ夜も昼も埋もれし希望を人は掘りゆく

(西岡徳江)

艦の行く青き比島の海になお船を柩の棄兵眠れず

(河上政治)

～今後の主な催物案内～

▶ ビール祭り

日時：9月17日(土) 15:00～17:30

場所：千葉大学けやき会館内「コルザ」

JR 総武線西千葉駅下車。東口駅前通りを東京方向へ約300m戻り、大学正門を入り左手のけやき会館1階。

TEL：043-256-2006

会費：3,000円

(なお、このけやき会館で当協会と千葉大学共催による、ドイツ年記念行事を10月20日～22日に行いますので、下見を兼ねて多数の会員諸氏の参加をお待ちします。)

～お知らせ～

ドイツ年記念行事開催中に、バザーを計画しています。ドイツ土産、又はドイツ製品で不要のものがあればご提供願います。ご提供頂ける場合は、その旨とその品物名、個数を同封の葉書でお知らせ下さい。品物は、ビール祭り当日または10月20日～22日午前中にけやき会館のバザーにご持参下さい。売り上げは、協賛行事の補助金とさせていただきます。

— 会費納入のお願い —

平成17年度会費未納入の方は早めの納入をお願い致します。

年会費：個人 3,000円

法人 10,000円

(6月5日付け当協会通信に郵便振替用紙が同封されています。)

『日本におけるドイツ年』行事、 マール・ワークショップ開催

布施由未子(文化担当)
橋口昭八(渉外担当常任理事)

本年が「日本におけるドイツ年」であること、6月に千葉県とデュッセルドルフ市の交流が始まることを記念して、同市在住で日本人駐在員の婦人方にも馴染みの深いマール・ワークショップ(トール・ペインティング)のC.ハーゼンバック先生を迎え、6月14日(火)10:00～14:00に京葉線幕張海岸駅前の国際コンベンションビュロー・千葉国際交流センター(WBGマリブイースト14F)において講習会を開催した。

先方の強い希望で急遽開催が決まったために、会員への連絡は5月15日の当協会総会や当協会通信で行い、最終的には会員7名に加えて、元ハーゼンバック教室関係者など計20名の参加があった。

当日は、まず最初にドイツ語の名称バウエルン・マーレイ(農民絵付)の正しい意味と趣味的装飾工芸となっている現状の説明があり、下絵、筆使い等基本の解説の後、各人、配られた教材の仕上げに挑戦、その間先生が一人一人順番に指導されるという形で進められた。

先生も生徒も熱が入り、結局当初予定の13時までには終了せず、1時間延長し、先生一行との昼食の時間が犠牲となったほど。参加者のうち先生の元お弟子さん達は再会を喜び、未経験者も段々と仕上がって行く作品に興奮の様子で、先生も満足の意を表された。

ドイツ年の日独友好とドイツ文化の体験の意味からも有意義な行事であった。



講演会参加者の皆さん(2)



マール・ワークショップ風景